

幼児を対象とした木工作の内容と方法 —保育者が行う木育—

守川美輪*

1. 研究の背景

松井(2013)は「木育は、木を使うことから離れてしまった今の時代に生まれた言葉で、すべての人びとが、木に親しみ、木の文化への理解を深めることを目指す教育です」と述べている。また、松井は「木育は幼児の心を育む」とし、木育を通して「5つの力を育みましょう」と述べている。その「5つの力」の内容を次に引用する。

5つの力を育みましょう

「木育」は、単に「木」に関する知識だけを学ぶものではありません。木でつくる表現活動を通して、豊かな自然によって育まれる命のすばらしさを知り、愛おしさを感じ、助けあうことや感謝することを学ぶのです。木育は、「こころ」を育てる教育なのです。

- 1 樹と木のつながりを感じる力が育ちます：身近な木の葉っぱや実、花などに興味をもち、樹木と暮らしの中の木とのつながりを感じる力が育ちます。
- 2 ものを大切にできる心が育ちます：「木でつくること」を通して、木は自然が育んだ「命」であることに気づき、木でつくったものに愛着を持ち、大切にできる心が育ちます。
- 3 工夫する力が育ちます：指を使い、音を聴き、匂いを嗅ぎ、五感を総動員して木に向かい表現することを通して、創造力を育みます。
- 4 根気や、やる気が育ちます：木でつくることはじっくり取り組む必要があり、根気が育ち、達成感を得ることができます。それは自信へとつながり、新たな課題に果敢に挑戦する力が育ちます。
- 5 協力する心、気づかう心が育ちます：助け助けられながら、つくり上げることにより、感謝の心や協力する心がうまれます。同時に木工道具をつかい、つくることを通して、加減することや、自分と相手の安全を思いやる心がそだちます。

宮崎県森林林業協会が実施した「宮崎県木育サポーター養成講座」(2017)において、松井の講演を聴き、指導を受けた。そこでは、木材で道具をつくりそれを使い続けることがなくなり、樹木や木材と人とのかわりが薄れていることなどの木育の背景と、松井が心を育てることを大切にして木育活動を行っていることを知ることができた。

木育に出会って、木育についての研究を始めた。木育に出会う前にも木製の様々な玩具を制作し、子育て支援イベント等で活用してきた。また、木製玩具をつくるだけでなく、子どもが木でつくる活動の支援をするようになっていた。木育という研究テーマを得て、心を育てることを意識しつつも、つくることが好きなので、木工作教材の開発や指導法の研究を主に行ってきた。

教材開発の結果、四輪の車の他、二輪車や木の馬に乗る木の人形などができた。幼児を対象とした木育活動において、幼児が丸太を切り車輪の材とすることや、その材に幼児が手動のドリルを使って

* 宮崎国際大学教育学部

穴を開けるという活動を含んだ例（守川 2024）は他にない。幼児は自分で丸太材を切り、切った材の中央に穴を開けることができることが明らかになった。

教材開発と並行して、幼児、児童、親子を対象として木製玩具の工作教室を行ってきた。こども園等で木工作教室を実施するが、園児が木工作をするのはそのときだけだったので、木育活動が継続して行われるようにするためにはどのようにすればよいかについての研究を始めた。研究の結果、保育者が木育について知り、幼児に木工作等の指導をすることで、継続的に木育活動を行おうとする意欲が高まることが明らかになった（守川ら 2022）。また、木育の様子を指導者以外の保育者が観察することで、観察した保育者も木育活動を行おうとする意欲が高まること、保育者が木育を行う際には、木材を使った簡単な製作活動の内容と方法についての知識を必要と感じていることが分かった（守川ら 2023）。

しかし、保育者が木育活動を行おうとする意欲は高まるものの、実際に保育者自身でやってみるところまで至っていない。そこで、保育者が自分でも指導できそうだと思うような木工作の内容と方法について検討するために、本研究を行った。

2. 研究の目的

保育者が木育を行う際に役立つ、幼児を対象とした木工作の内容と方法について検討する。

3. 研究の方法

保育教諭と共に、A 園と B 園で年長児を対象として、木の話と木工作からなる木育活動を行った。A 園は宮崎市佐土原町にある幼保連携型認定こども園で、2023 年に木工作教室を行った際に共同研究を申し出て協力を得た。B 園は宮崎県東諸県郡国富町にあるこども園で、2021 年と 2022 年に木育に関しての共同研究を実施しており、今回も協力を得た。両園ともに自然に親しむ活動を保育内容に取り入れている。

A 園と B 園で各 4 回の木育活動を実施した。各回の活動後に、A 園と B 園の年長児の担任である保育教諭 2 名と守川が活動の内容と幼児の姿を振り返り「木育活動の記録」を作成した。全活動終了後、保育教諭 2 名が「自分でもできそうな内容」について、園長が「活動の感想」を書いた。それらの記録から幼児を対象とした木工作の内容と方法について検討した。本研究は宮崎国際大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認された。

4. 研究の結果

(1) 木工作の内容と方法

下記のものを製作した。

1) 人形

人形（図 1）は幅 24mm の杉角材を 48mm や 72mm に切って紙やすりで磨き、カラーペン



図 1 幼児に示した人形の例

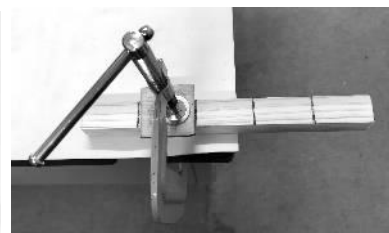


図 2 クランプで固定

で人の姿を描いた。あらかじめ、角材に切り線を引き、薄く切り込みを入れておいた。幼児がのこぎりを使う際に手で材を押さなくてもよいように、材はクランプで机に固定した（図 2）。のこぎりは

刃の長さ 16cm の導突きのこぎりを使用した (図 3)。切った後は紙やすりで磨き、カラーペンで思い思いに顔などを描いて色をつけた。紙やすりを使う順について図を用いて伝えた (図 4)。

2) 二輪車

二輪車 (図 5) は守川ら (2022) が実施したのと同じものである。車輪とする丸太は直径 4cm・5cm・6.5cm から選べるようにした。丸太を刃の長さ 20cm の片刃のこぎり (図 6) で切る際は、丸太を木枠に固定した (図 7)。切った丸太の中央に型紙と千枚通しを使って印をつけ、型紙を外してポンチを当てて木槌で打ち、窪みをつくった。その手順を図 (図 8) に示し、それを見ながら作業ができるようにした。締め具 (図 9) を使って材を固定し、手動のドリルを使って、穴を開けた。車輪を繋ぐ材は様々な長さに切って穴をあけておいたものから選べるようにした。材を紙やすりで磨いて、木材用塗料着色して乾かし、組み立てた。それらの手順を図にして掲示した (図 10・図 11)。

3) 船

初めに数種類の船 (図 12) をタライの水面に置いて見せ、傾かない船をつくりたいという意欲が持てるようにした。船は幅 7cm 長さ 14cm 厚さ 12mm の基本の形 (守川 2018)

だけでなく、様々な大きさや厚さの板から選べるようにした (図 13)。船の土台の縦横比を 2 : 1 とし、前方が直角三角形になるようにした。

切り線に薄く切れ込みを入れておき、材に当て木をして、机にクランプで固定してのこぎり



図 3 導突きのこぎり

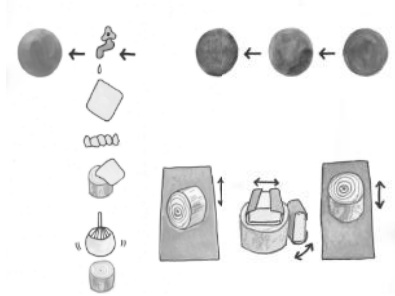


図 4 紙やすりの使い方の図

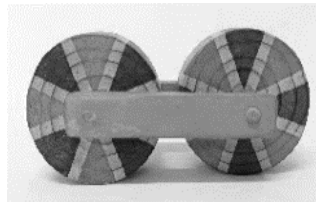


図 5 二輪車



図 6 片刃のこぎり

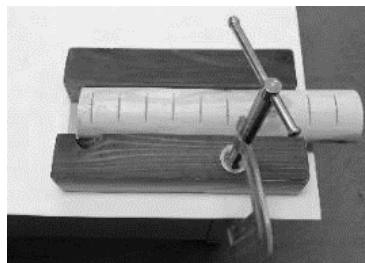


図 7 丸太を固定する枠

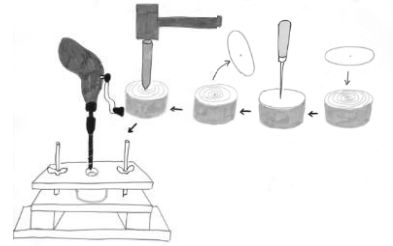


図 8 印のつけ方の図

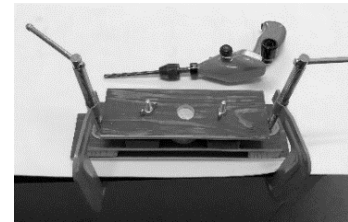


図 9 材を固定する締め具

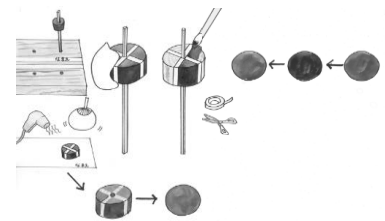


図 10 色のつけ方の図

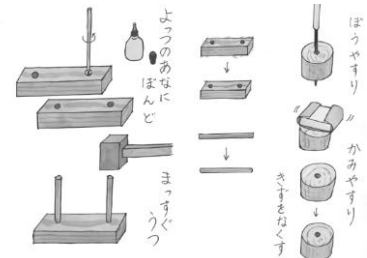


図 11 組み立て方の図



図 12 数種類の船を水面に置いて見せた

た。木片を選んで磨き、水に強い接着剤で接着し、木材用塗料で着色した。水を入れたタライを置き、つくった船が傾かず浮かぶかどうか試すことができるようにした。

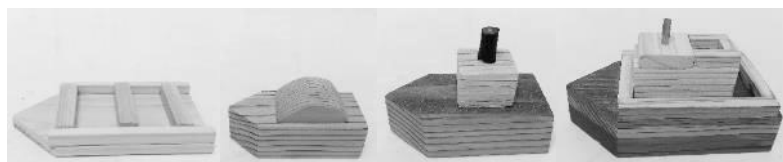


図 13 幼児に示した船の例 土台を選べるようにした

4) 剣

剣は A 園での自由製作の際に幼児が製作したものから発想した。幅 9mm の杉角材 15cm と 34cm を組み合わせた。材に 6mm の穴を空けておき、木材用塗料で着色し、ダボで繋いだ (図 14)。B 園のみで実施した。



図 14 剣



図 15 ユニコーン

5) 自由製作

自由製作では、A 園ではユニコーンをつくりたいという声を聞いていたので、木の人形と木の馬 (守川 2021) を選択できるようにした。ユニコーンは木の馬の頭に自然木の角を接着した (図 15)。B 園ではトラクター、飛行機、ヘリコプターをつくりたいという声を聞いていたので、それらがつくれるようにした (図 16、図 17)。



図 16 飛行機



図 17 ヘリコプター

(2) 木の話の内容

A 園で保育教諭が絵本「どんぐりかいぎ」「そりになったブナの木」「森のみずなら」を読んだがあまり反応がなかった。「たけのこ によきよき」は園敷地内に竹林があるせいか、関心を持って聞いていた。

B 園では樹皮のついた杉丸太を見せ、それと同じ材を使うことを伝え、屋外の活動場所 (図 18) にあるメタセコイヤと似ているかどうか尋ねた。



図 18 活動場所

(3) 活動日時と場所及び内容

活動日時と場所及び内容は表 1 の通りである。A 園では木を切る場所にテラスを使っていたが、ク

表 1 活動日時と場所及び内容

A 園			
1	6 月 15 日 9 : 30 ~ 11 : 00	ホール、テラス	人形 車輪を切る
2	7 月 20 日 9 : 30 ~ 12 : 00	ホール、テラス	二輪車
3	8 月 3 日 9 : 30 ~ 12 : 00	ホール (雨天のためテラスを使わない)	船
4	8 月 10 日 9 : 30 ~ 12 : 00	ホール (前回、テラスを使わずやりやすかった)	自由製作
B 園			
1	10 月 19 日 13 : 00 ~ 14 : 40	園庭の木陰	人形・剣
2	10 月 26 日 13 : 00 ~ 14 : 40	園庭の木陰	二輪車
3	10 月 27 日 13 : 00 ~ 14 : 40	保育室 (雨天のため)	船
4	11 月 2 日 13 : 00 ~ 14 : 40	園庭の木陰	自由製作

ーラーが効く室内で全ての活動を実施した方が快適でやりやすかった。室内にはブルーシートを敷き、活動後掃除機で掃除をした。B 園には園庭のメタセコイヤの木陰にテーブルと長椅子があり、雨天時以外はその場所を使った。園庭では木くずの掃除をしなかったので、片付けが簡単であった。

(4) 幼児の姿と気づき

「木工活動の記録」を要約して次に示す。

1) A 園 第 1 回（人形、車輪を切る）

準備段階から興味津々だった。子どもは見やすい場所で説明を聞いていた。整列させなくてもよいことに気づいた。人形の作品例があるので、描けない子どもはイメージが持ちやすい。紙やすりを使う順が絵で提示してあるので、確認することができた。

のこぎりは実際に切りながら説明をし、危険であることも伝えることで、子どもたちは慎重に作業をしていた。数名「怖い」と口にする子もいたが、友達の姿をみたり、保育者と一緒に切ってみたりすることで、恐怖心も薄れたようで、その後は自分でできていた。

作業の際に、混雑するかと思ったが、子どもが状況を見て作業する場所を探していた。のこぎり、紙やすり、色つけとほとんどの子が自分で取り組んでいた。不安に感じる子は「先生こう?」と確認しながら進めていた。

作業後、ブロック遊びの際に作った人形を用いて遊んでいた。降園時、母親に「家族みんなの人形をつくったよ」と嬉しそうに報告する姿があった。

カラーペンを使った後は蓋を閉めることをやって見せながら説明すると、それを守っていた。紙やすりの使い方の図に、木片に巻いて使う方法を示しているが、やって見せていなかったもので、伝わらなかった。紙やすりの裏面に色丸をつけておき、紙やすりを並べて置いていたが、並べる順が図と逆になっていることに途中で気づき、並べ直した。使い終わった紙やすりを元の場所に戻すことを伝えていなかったもので、紙やすりが放置されていた。

のこぎりを使う際、どの位置に立てばよいか、刃を真っすぐにするためにどうすればよいかを言葉にして伝えていなかったためか、立つ位置が悪く、刃がたわんで挽きにくいということがしばしばあった。体の位置を直して軽くひくことを伝えた。次第に軽くひくことができるようになっていたが、コツがつかめず、力を入れすぎて斜めに切れてしまうこともあった。

最初、「人形は 2 個つくろう」と伝えていたが、家族が多い子どもが「もっとつくりたい」と言い、材を渡すと嬉しそうにしていた。飽きずに複数個つくる姿があり、個数を決める必要はなかった。

2) A 園 第 2 回（二輪車）

手順を聞く際、ポイントを理解しながら集中して聞いていた。のこぎりを使う場面では前回よりも手つきがよくなっていた。図を自分たちで見ながら取り組むことができていた。

初めてということもあり、ドリルコーナーが混雑していた。「ドリルを体にくっつける」などやり方を示していくことで、少しずつコツを掴んでいた。穴が開くと達成感、満足感で笑顔を見せていた。ドリルで穴が開かないと疲れた様子の子と交替して穴を開けたが、どのようにすればよいか問いかけて考えさせ、考えを聞くことをしなかった。色塗り、組み立てでは説明不足であった。初めての活動は全員にやって見せるべきだった。

二輪車の工程は長かったが、子どもたちは完成を目指していた。切る、磨く、穴を開ける、色を塗る、組み立てる、様々な動きを体験しながら自分のものにする姿があった。

つくった作品を持ち帰ることで、保護者の方も「すごいですね」「木に興味を持ち始めました」と話す姿があった。

車輪の大きさに応じて横棒の長さを選ぶ必要があった。選んだ横棒が短かかったり、2本の横棒の長さが揃っていなかったりして、組み立てられないことがあった。横棒の材を置いているところに二輪車の見本を置いておけばよかった。

穴を開けた車輪の材に色を付ける際、穴に割り箸をさして割り箸を持つようにした。乾燥用の土台にさして乾かした後、組み立てる際に割り箸を抜く。穴に割り箸をさしたり抜いたりするのができないと言う子どもが多かった。「細い方からさす。太い方に押して抜く」という経験をしたことがないのではないか。抜いて見せるだけでなく、「どうすればよいか。割り箸のこちら側が細い」と問いかければよかった。

組み立ての際、はみ出したボンドを濡れ雑巾で逐一拭いてやった。子どもがそれをやりたがらないという勝手な思い込みがあったのかも知れない。はみ出したボンドを拭くことを大切な手順として意識できるようにするとよいのではないかな。

3)A園 第3回(船)

子どもたちは活動を心待ちにしている様子だった。保護者の方が送迎の際に動画を視聴できるようにした。「のこぎりで切るなんてすごい」と今までなかった反応があった。

船が浮くかどうかの実験を始めに行うことで、子ども達の関心が向き、意欲につながったように感じた。子どもたちは慣れてきたのか、それぞれが考えながら、黙々と作業に没頭する姿が印象的だった。実際に、浮かぶかどうか試す姿があった。船の中央に10cmの丸棒をさして、丸棒の先にプロペラのような細長い板を固定したこどもが、「倒れた」と言い、7cmの棒に替えた。「また倒れた」と言い、5cmの棒に替えた。このように、船が転倒した場合はあれこれ試し、転倒ないようにしていた。

前回、二輪車の車輪を塗る際にマスキングテープを貼って塗り分ける方法をやって見せた。それを覚えていた数名の子どもが、「テープを貼っていいか」と聞きに来た。船をクランプで固定してのこぎりを使う際、当て木を使うことを覚えていた子どもが当て木はどこにあるか聞いて来た。

子どもは自分でできそうなこと、できることは自分でしていた。けれど、できない時はやってほしいと伝えたり、どうしたらいいのか聞いたりしてきた。どうすればいいか言葉で伝える前にすぐにやって見せてしまった。どうすればよいかまずは子どもに聞くとよいのかもしれない。

ひとりの子どもがきれいに塗った船を持って来てたたずんでいた。何を言ってくるわけではない。何かを伝えたい様子だった。

前回、「王子の船と海賊の船をつくりたい」と言っていた子どもがいたが、それを今回つくっていた。2艘できて嬉しそうだった。その子ども以外にも船が完成するとすぐに、「もうひとつつくっていいか」聞きに来て、続けてつくる子どもが何人もいた。

4)A園 第4回(自由製作)

「楽しいことが始まる」「早く作品をつくりたい」と期待を持つようになっていた。のこぎりの使い方など安心して見ることができた。何をつくるか決めて、すぐに作業をすることもいるが、なかなか作業できない子どももあった。話をするうち、何をつくるか決めた。気持ちが固まると作業に取り組む姿勢も変わった。

車を作る際は穴開けに時間がかかると思い、電動ドリルを持ち込んだ。電動ドリルの作業は今回参

加した学生に任せた。接着しにくい時にはダボを入れて繋ぐ方法が適していた。

前回のこぎりを使う際、切終わりを勢いよくひくと材が飛んでいってしまったと聞いていたので、切り終わりはゆっくりとそっと切ることをやって見せた。また、手動のドリルを使う際になかなか穴が開かないことが多かったので、「ドリルを上から押しもらうとよいです」と言って、ドリルを持つ手の上に学生の手を重ねて押しもらってやって見せた。手動のドリルを使う際に「だれか上から押し」と言う声が聞こえてきた。何人かはその方法を試していたようだった。

ユニコーンがつくれる材を持ち込み、その作り方をやって見せたので多くの子どもがユニコーンをつくっていた。ユニコーンは黄色一色に塗った作品例を見せたが、子どもは様々な色を塗っていた。4本の足を別々の色で塗っている子どもも多く、美しい色合いだった。ユニコーンに乗る人をつくれる材も準備していた。ユニコーンと人とどちらかをつくるだろうと予想していたが、両方つくる子どもが多かった。

作品をクラスに持ち帰り、「ユニコーンを使って遊んでよいか」聞かれた。良いと答えると皆が作品を持ち寄り、ごっこ遊びをしていた。その姿を年中児や年少児が見て、「いいな」「つくってみたい」と口にしていた。

ユニコーンと人以外に、手裏剣、椅子、机、車のついた家、恐竜、ドレス人形、山、飛行機、コマなどができた（図19）。



図19 A園自由製作 作品の一部

5)B園 第1回（人形と剣）

はじめに、「これは杉です」と材の種類を伝えていた。食べられる実や遊びに使える実がなる木、きれいな花が咲く木は題材にしやすい。山には杉の木が沢山生えているので、散歩に行った時、杉の木を見せることができる。話を聞くのが苦手な子どもたちだが、道具を使いたいという欲求と緊張感のある話にひきつけられていた。いつもは見せない真剣な眼差しだった。

園庭にある大木はメタセコイヤの木で樹齢60年ほどだと活動後に園長に聞いた。開園する際に植えたとのこと、このことを先に聞いて子ども達に伝えれば、60年をかけて太く高く育ったことを伝えることができた。

立体的な人形づくりは子どもたちの関心が高かった。立体を扱うので、複数の面に描ける。就学するまでに、正面・側面・背面・底面などの認識を育てることが大切だと言う話を聞いたことがある。その認識力を育てることができる。細い木材のことを「薄い」と表現した子どもがいた。活動を通して、大きい、小さい、細い、太いなど、形容詞の認識にもつなげることができる。

剣をつくってよいか聞かれたので「良いです」と答えたが、その後のトラブルが予想された。守川は危険性や注意すべき点を分かりやすく子どもたちに話し、「先生はあなた達を信頼して、剣をつくって良いですと言ってくれました」と伝えていた。活動が終わった後、室内で危ない遊び方を始めた子どもに「先生は私たちを信頼して『いいよ』と言ってくれたんだよ」と自分たちで注意し合っていた。

のこぎりで手の怪我をした子どもが2名いたが、想像したより怪我をする人数が少なかった。手を切ったことよりも木工工作の楽しさの方が勝っていて、何事もなかったかのように活動に戻っていた。2名とも手を切らないようにのこぎりの持ち方を工夫していた。

筆の使い方については、自分たちで気をつけていた。自分達の興味、関心、成長にあったやりたい遊びのルールならば、子ども達は守れるのだということに気づいた。途中で他の遊びを始めた子ども

は 33 名中 2 名だけだった。活動が終わった後は、室内の積み木と人形を組み合わせて遊ぶ姿や、剣で安全にごっこ遊びを楽しむ姿が見られた。

一人のこどもが剣を 3 本つくって見せに来てくれた。守川は「3 本つくったんだね」と応じただけだった。じっくり、色や塗り方などを観察して、声を掛ければよかった。「剣ができた」と見せに来た子どもに「色を沢山使ったね」と伝え、指で示しながら「ここを虹色に塗った」と教えてくれた。

「どんな剣なの」とさらに聞けばよかった。ピンク色の地に焦げ茶色のドット模様の剣を見せにきた子に「きれいだ。ピンク色の豹みたいだ」と思ったのに、それを伝えなかった。黒と赤が入り混じった剣を見せてくれた子に「すごい。強そうな剣だ」と思ったのに、「できたね」としか言わなかった。作品への声掛けが不十分だった。

6)B 園 第 2 回 (二輪車)

作業の説明が始まると、回りを囲むように集まり、真剣な眼差しで見ていた。回を重ねるごとに意欲的になっているようだった。話が終わると目を輝かせて「よし。やろう」と言いながら、タイヤを切る作業に取りかかっていた。前回切りにくそうにしていた子どもがコツを掴んでのこぎりを動かしていた。紙やすりを使い、「ほら、つるつるになってきたよ」と嬉しそうに教えてくれた。感触を確かめていた。

早くに終わった子どもが「剣をつくりたい」と言う。材の入った箱を示すとすぐにつくり始めた。その後、何人も剣をつくっていた。

前回までは、次に何をしたらいいか教員に尋ねる様子が多く見られたが、今回は説明の段階で真剣に聞いている子どもが多く、集中して取り組んでいる子どもが多くなっていた。終わりの時間が近づいてきても、「まだやりたい」「ここまでつくりたい」という子が数名いた。「次はいつあるの?」と次回を楽しみにしている子どももいた。

7)B 園 第 3 回 (船)

大きいタイヤと小さいタイヤの車ではどちらが遠くまで転がるのか、穴のいた船は浮かぶのか、などの実験が面白かった。今回、クランプの注意が厳重だったが、活動が始まって 3 回ほど子どもや教員の足の側に落ちる様子を見て、その意味が分かった。

工作が始まると、木工現場で働く職人さんのように、当たり前のように道具に向かい、工作を楽しんでいる姿があった。視点が合にくい子どもが、のこぎりの位置を合わせる事が難しい様子だった。のこぎりを使う時に机が動いていた。木をクランプで固定する時には机は重い方が効果的であった。

ひとつの作業が終わると「次は何をするの」としばしば聞いてくる子どもに、「次は何をすればいいか思い出してみよう」と応じた。そうすると、分かったような顔をして離れた。船をつくった後、「人形をつくりたい」と言って人形をつくっていた。

船を作り終えて、何人かは再度船をつくっていた。前回の二輪車が完成していない子どもは完成させることができた (図 20)。



図 20 船と二輪車の一部

8)B 園 第 4 回 (自由製作)

今回は飛行機とヘリコプター、トラクター、ユニコーンと人形、車の材料を持ち込んだ。これらの材料を使って製作した子どもが多かった (図 21)。「箱にどの材料が入っているか図で示しているので、

作品例を見て、何が何個必要か自分で判断して材料を取るように」と伝えた。このことは子どもに伝わったようで、自分で材料を取り出していた。

作品例を見て材料を集め、それを加工して色をつけ、乾かして組み立てるという作業は時間がかかる。欲張ると完成しない可

能性や自分には無理だと判断してつくるものを変更したり、ひとつに集中する作戦に切り替えたりした子どもも見られた。

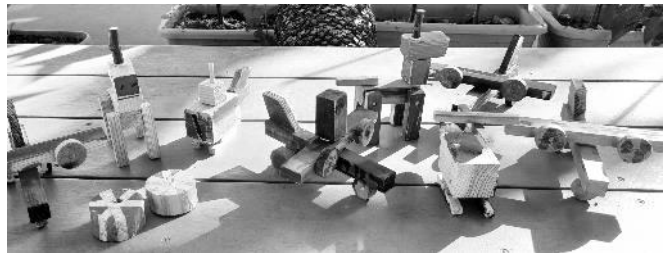


図 21 B園自由製作 作品の一部

「クランプはどこにあるか」など、子どもたちが道具の名前を覚えて使っていた。集中して、活動に没頭する子もいれば、途中で違う遊びをして活動に戻っている子があった。自分でつくりたいものを決めた子どもが嬉しそうに切りたい線を定規とペンで引いていた。

ダボを打ち込むのとボンドを使うのが同じコーナーだったので、混雑していた。コーナーを分けるか場所を広げるとよい。電動ドリルを手伝いの学生が扱っており、機械好きの子どもが群がっていた。

今回は「この後どうするの」と手順を聞いてくる子どもはいなかった。手順を理解していたようだ。作業が思うようにできなくてどうしたらよいか聞いてくる子ども、材のサイズが合わなくて聞いて来る子ども、組み立て方が分からなくて聞いてくる子どもばかりだった。材の準備と説明が足りなかった。完成まで行きつかず、「お願いだから、もっとさせて」と言いにくる子どももいた。

(5) 木育活動を終えて

1) A園の園長

普段は集団活動を苦手とする子どもが、どの子よりも集中して製作に取り組んでいた。木育活動を観察することで、子ども理解を深める機会となった。保育教諭の発案で年少児・年中児・年長児が木工作を行い、作品を地域の文化祭で展示した。

木材やのこぎり、釘や金槌を用意しておき、子どもが使いたいと言って来たときに、使い方をやって見せるなどすれば、子どもの「作りたい」という欲求が満たされ、作品は自己実現の証となるのではないかと考えた。

今後の活動について、自分たちだけでは指導に限界がある。子ども支援のヒントを得る機会があるとよい。

2) B園の園長

子どもを信じて危険なのではと思える体験も園で用意していくことで、子どもの興味関心の幅が広がる。準備に手がかかることに関して職員の理解がどれだけ得られるかを考えると、木を切り紙やすりで磨いてボンドで接着することで、形あるものができればよい。

既のにこぎり、紙やすり、金槌等は揃えてある。園の気風の中でどれだけ木育活動を入れられるかどうか。今後は年間計画のアドバイスを得たい。年長児の木育活動に年間 4 回ほど関わってほしい。

(6) 自分でもできそうな活動

1) A園の保育教諭

木に関する絵本の読み聞かせは無理なくできる。ただ、絵本の内容を選ぶのに迷うと思うので、絵本リストがあると取りかかりやすい。

研究のための木育活動が終了し、木育活動の成果と過程を同僚の教員に伝えるために、木工工作の機会を設けた。年長児の木工作品を見て、「いいな」とうらやましそうに言っていた年少児・年中児も木工作ができるようにした。ちょうど、2023 年 11 月に地域の文化祭があり、作品展に木工作品を展示することとした。

自分自身、初めてのことであったので、年中児は「船」、年長児は「二輪車」に挑戦した。年少児は滴型に切って穴を開けておいた材を、紙やすりで磨いて仕上げた。製作の意欲が高かった年少児・年中児は喜んで製作した。同僚の教員からは、木のおいを感じながら、楽しく出来たとの言葉があった。

再度二輪車作りに取り組んだ年長児は作り方、進め方は分かっているので、よりよいものをつくろうとする姿がみられた。しかし、道具の準備が不十分だったので、時間がかかった。丸太を固定する器具、穴を開ける土台など、用意していれば、もう少しスムーズに作業出来たと反省した。今回道具を揃え、守川から丸太を固定する杵やドリルを使う際の締め具を受け取ったので、今後は自分自身で自信を持って指導できそうである。今後は親子一緒に取り組める機会があるとよい。

2) B 園の保育教諭

この研究が始まる前は、材料の供給をどうするか、のこぎりなどの道具なども揃えないといけない、ケガのリスクも高そうだと、不安や疑問が多くあった。木育活動のことを深く考えたことがなく、やってみようという気持ちもなかった。

しかし、この研究に参加して、道具と材料さえ揃えば、意外と身近に楽しめる活動だということに気づいた。心配していた怪我のリスクもなく、独特の緊張感、危険だからこそ、安全にしようという意識が高まっていた。

自分が今の状況で、保育に取り入れることができそうなのは、「人形・剣・船」である。穴を開けるドリルを使うことは自分ではできそうにない。のこぎりで切り、やすりをかけて、色を付けて、ボンドやダボで付けるぐらいならばできそうである。

今後は「意外と木工工作は気楽に楽しめる」という木工工作の魅力を広めてほしい。

4. 考察

保育者が木工工作の指導をする際には、今回取り扱ったものの中では、木を切って磨き、ボンドで接着し色をつけて完成できる人形や剣、船がふさわしい。親子を対象とした製作活動を実施するのもよいと考える。

A 園では保育教諭が主体となって、年少児・年中児・年長児に木工工作の指導をした。二輪車製作指導では、タイヤの材に穴を開ける際、タイヤを固定する締め具があった方が良かったと聞いた。丸太を固定する杵とタイヤの材を固定する締め具を各 3 台及びクランプで材を固定する際の当て木 10 枚をつくって渡した。保育教諭自身が木工工作指導をすることができたことは今回の研究の成果の一つであると考えられる。

どの題材でも、最初のうちは材の切線に浅く切り込みを入れておくとよい。のこぎりを使う際に材は手で押さえずに、当てを木あててクランプで机に固定すると切りやすい。のこぎりの扱いになれば、切り込みを入れていない材を幼児が一人で切ることができた。

初めて使う道具の使い方や組み立て方については、幼児に見えるようにしてやって見せ、説明をす

るとよい。材料置き場に作品例を置いておけば、どの材を何個使うか見て判断できる。手順を示した図や作品例を提示しておくといよい。

できないと言って来た子どもには、「どうすればよいか」と問いかけ、考えを聞くとよい。手動のドリルは持ち手を体に寄せ、上から押すようにするとよい。導入で、どのような船が浮くか予想させた上でやって見せると、意欲を高めることができる。自分で判断できることは自分でするようにという幼児への声掛けは有効であった。

幼児が作りたいたいといったものがつくれるように準備することで、飛行機やヘリコプターなど新しい木工作教材をつくることができた。また、幼児は前回つくった作品の作り方を覚えており、材料があればつくっていた。また、時間があれば、繰り返してつくっていた。材料を多めに準備するとよい。

子どもは指導者に作品を見せに来るが、ゆっくり応じることができなかった。作品の形や色を見て、気づいたことを伝えるようにしたい。また、子どもに自分の作品をどう思うか意識的に尋ねるようにしたい。子どもの表現を受容し、具体的に良さを伝え、達成感を共有すればよかった。鑑賞会や展示会をすれば作品のよさについて、幼児と語り合うことができるのではないかと考える。

集団活動が苦手な子どもが集中して取り組むことができたのは、図や見本を示し、工程をまとめて説明し、幼児が自分のペースで製作することができたからではないか。また、子どもから質問や要望があればその都度受けるようにしたことで、要望を伝えやすく、必要なところだけの援助を受けることができたためではないかと考える。この点については今後の検証が必要である。

5. 今後の課題

園長や保育教諭から、木育活動について支援をしてほしい、木育活動の楽しさを広く伝えてほしいとの要望があった。今後も木育活動の支援をし、研修会等の機会に、木育活動を取り上げていきたい。

付記

本論文はその一部を日本保育学会第 77 回大会にて発表している。

謝辞

本研究の実施にご協力いただきました七つの星幼稚園園長 清水珠香子先生、保育教諭 古澤堂史先生、三名こども園園長 間所あゆみ先生、保育教諭 緒方晋哉先生をはじめとする先生方、園児及び保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用および参考文献

松井勲尚 (2013) 『幼児の心とからだを育むはじめての木育』 黎明書房

守川美輪 (2018) 「木の船をつくって遊ぼう」 宮崎国際大学教育学部『教育科学論集』 第 5 号 28-39

守川美輪 (2021) 「幼児を対象とした木工作の指導-木の人形を乗せる木の馬-」日本保育学会第 74 回大会『発表論文集』 347-348

守川美輪・間所あゆみ・谷田純子 (2022) 「幼児が材の大きさを選んでつくる二輪車の指導—保育者が行う木育—」 日本保育学会第 75 回大会『発表論文集』 K17 -18

守川 美輪・坂本 圭佑・山田 七奈・高田 ミカ (2023) 「幼児が材の大きさを選んでつくるレーシ

グカーの製作 ―保育者が行う木育―」日本保育学会第 76 回大会『発表論文集』K-A-2-01

守川美輪（2024）「幼児が材の大きさを選んでつくるレーシングカーの製作 ―保育者が行う木育―」

宮崎国際大学教育学部『教育科学論集』第 10 号 139-154